立教大學新聞
発行所
豊島区池袋三丁目
© 立教大学新聞学会
振替東京 70852
電話(97)3121—9内線97
発行人 野口定男
毎月廿日発行

IKEBUKURO
芳林堂書店
TEL(97)4080

二十日に第一回学生大会

原水爆問題など 新執行部を中心に討議

五月三十日（金曜日）午後二時三十分からタツカーホールにおいて、定例第一回学生大会が行われる。まず旧執行部員によって昨年度の一般活動の内容が報告され、そのあと、二十二日から二十九日の間に各クラスで討論されている今年度の活動も方針を審議決定する。又緊急提案もとり上げられ、契約の改正も学生の要望があればその場で行われる。この大会には定足数は規定されていないが全学生の参加が望まれている。

主な討議内容は次の通り。

マ原水爆禁止運動
米英の核兵器実験の強行と全世界にわたる戦略体制の再編成が、強力におし進められている。我々は（1）エニウエトク、クリスマス島の核兵器実験反対、米英はソ連にならつて実験を停止せよ。（2）沖縄と日本のミサイル基地化反対。（3）西独をはじめとする西欧の核武装化反対、非核武装地帯を設置せよ。
以上のスローガンのもとに結集し米英科学者や多数の平和愛好者と共に立上り、国際政治を動す力となろう。

マ学内問題
本学の教育制度は外国の制度の直輸入であり、日本の大学の実情にピツタリしたものではない。

マ指導教授制
「人格の陶冶と学生個々の条件に応じた助言をする」ということの制度の本質的な意義は高く評価されるが一クラス六〇～七〇人の生徒を一人の教授が果して指導出来るかどうか。また指導教授の配置は極めて機械的で各クラスの特殊性が考慮されているかどうか。

マクラス制
学校側が目指す小グループ制は、実態はほとんど合併クラスに近いものになつている。またクラス編成においても、運動部員を一つのクラスに集中させていることや、異つた学科の学生を一クラスに合併させていること等、疑問の点が多い。

マ不自由選択制
選択課目も選択出来る程の幅をもつていない。大学の原則は学生が教えられるのではなく学ぶのである。学生の自主的な勉学のため可能なかぎり選択の幅が広くなることを望む。

マ出欠制
学生を教室に引き付けるものは授業の内容である。不自由選択制により出欠制が必要となり、その結果うるさい授業が出現し生徒も教授も学問意欲を失つてしまうというのが現状である「学生を種々の誘惑から守り人格の陶冶をはかる」という学校側の意図は、大いに疑問がある。その他の問題としては「学年制」「学生心得」特に服装に関する規定「施設の問題」教室・図書館・学食等がある。

新執行部活動始める

五月十九日、本年度第二回級委員会が開かれた。出席者二十一名、委任状十二名（定足数二十人）の出席をもつて行われ、藤上君（経3）を議長に選び議事に入つた。まず、機本委員長より、新執行部による活動の経過報告があり、これに対する質疑のち、新委員の紹介、つづいて、常任委員の任命を行い、二十二名を決定した。次に、三天政党立会演説会の件について委員長より説明、これを同意し、昨年より行われていたクラス討論を本年も行うことを説明し、その方法について質疑があつた。また五月三十日に予定されている学生大会について確認し、会議を終えた。なお、クラス討論は二十日から行われている。

立教キャンプ予定

例年の夏期キャンプについて学生部から今年の予定が発表された。場所は山梨県北巨摩郡清里村で、くわしいことはつぎのとおり。
日時　七月三日―七月八日
費用　二千五百円（往復を含む）
定員　男子学生　六十六名
　　女子学生　三十四名
（経2）が立候補し無競争で当選した。またこれは去る四月十六日から発足した関東大学文化団体連盟の委員も兼ねている。

河田君（経二）当選

文化会補欠選挙
去る五月十六日のキャプマネ会議において常任委員庶務の補欠選挙がわれ、経済学会の河田薫則君

アジア大会 代表選手を招く

アジア友好会を中心に企画

アジア大会の各国代表選手を五月二十九日に本学に招き、アジア友好の一助としようとする企で、アジア友好会を中心に進められている。
五月二十四日に開催した第三回アジア競技大会に緑勢千四百名のアジア地区代表の精鋭が来日しているが、これを内機にアジア友好会（昨年十一月発足。委員長　田村英里・経四）が音頭とりとなり、文化会、体育会が後援して、この度の運びとなつたものである。当日は大会代表のほか、学友会館と駒場からアジアの日本留学生をあわてて招待する予定であるが、二十九日は競技開催中である関係上、当日プランクの者に限られるため今のところ何名が訪れるかは未定である。当日のプログラムは次のとおり。
一、柔道、空手、弓道の各部の出場による我が国独特のスポーツ技の披露
二、茶道部による〝野立て〟の紹介
三、グリークラブ、日舞研究会、アヒル会、ハーモニカ部、軽音楽部の出場によるアトラクション（於、タツカーホール）
四、総長、各教授の出席で歓迎レセプション（於、学生食堂）

棚橋氏（本学講師）藍綬褒章受く

博物館事業の功労によつて

棚橋氏

去る五月三日憲法記念日に、本学で博物館学の教鞭を取つておられる棚橋源太郎講師（八十九歳）がその博物館事業につくした功労で藍綬褒章を受けた。
同講師は明治三十九年、東京高等師範学校（現教育大）付属博物館主事になられてから、文部省東京博物館長、赤十字博物館長を歴任し、その間再度欧米の博物館視察のため留学するなど、博物館事業に尽瘁し、また日本博物館協会の生みの親としてその育成につくされた。ことに昭和二十六年に公布された博物館法の制定にあたつての功績は大きい。
このたびの受章もこれら一連の博物館事業につくした功労に対してであるが、同氏はその他にも、その前半生においては、学校での理科教育の在り方について大きな功績がある。それは、現在各界を賑わしている科学教育振興の問題の中心点ともいうべき科学教育のことである。
先生は明治二年生れで今年八十九歳の高齢であるが、現在文部省社会教育分科審議会委員、日本博物館協会顧問をされ、ますます壮健である。

地割式行わる

十九日　総長ら出席

法学部校舎
法学部校舎の地割式が、去る十九日午後四時から、総長はじめ、理事、建築委員、業者が立合い、蔣田主教、竹田、後藤、宅間各チャプレンによつて、正門前グランドにおいて行われた。
なお来春三月の完工予定である。

四年、教育実習予定

今年もまた例年の如く、四年生の教職課程の取得単位としての教育実習が六月二十三日から始まる。

教授法については、すでに五十年も前に、実験室教育法などを提案実施されて、科学教育振興の基礎を固められているのである。
法学部校舎の地割式が、去る十九日午後四時から、総長はじめ、理事、建築委員、業者が立合い、蔣田主教、竹田、後藤、宅間各チャプレンによつて、正門前グランドにおいて行われた。

論説　総長公選の根本原則

教職員による直接選挙へ

本学では、昭和三十四年六月の総長改選期をひかえ、その選挙制度（立教学院寄付行為第七章二十七条―三十条）をめぐり、一昨秋以来、制度調査会（総長、小中高校長、各学部長、同窓会理事、各教授会代表等）の寄付行為分科会で、その規約についていろいろと検討が重ねられてきている。
総長選挙に関しては、今までは学院理事会がその選出にあたつており、そのため大学の教授および学生のなんら知らぬ間に総長が学院理事会において選出されてしまつていた。しかし昭和三十年七月、現松下総長の就任以後になつて、そのような事例に対して現行寄付行為の非民主的な性格につき、ようやく学内の各団体から鋭い批判の声が起つたのである。教授会をはじめ、学生団体からの、こうした二方的措置に対する反省を求める声がそれぞれ起つて、制度調査会というのも、そうした現行の立教学院制度を全面的に再検討しようという気運から生まれたのだ。
すなわち、寄付行為分科会内に寄付行為準備会なるものを設置し、ここで原案をねつて、分科会に対して答申を行つているのである。そして昨年以来四回にわたる会合の結果、去る三月四日の準備会において、現行寄付行為の院長＝総長という規定に対し「院長と総長を制度上分離する」という方針をうちだし、総長選出法については、大学関係者において独自に決めることに決定した（級委会機関紙、立大学生新聞第二十一号）
現在、総長選挙をめぐつて、大学案同窓会案、小・中・高案、理学部案、経済学部案と五つの寄附行為改正案が提出されているが、これらは大体二つに分れる。一つは、今迄通り院長の選任は院長候補者選衡委員会において候補者を選出し、理事会において任命するという小・中・高案である。そしてもう一つは、その選出に関しては大学教職員の公選で選出し、理事会によつて任命するという理学部案、経済学部案である。
また、これら各団体案以外のものとして、学生側から学生四百名につき一票の投票権を与えよ、などという要請が提出されており、現制度の改正を促すと共に、学園民主化への第一歩として、級委会を中心に総長公選の対策がねられている。
大学という特殊な社会においてその最高責任者の決定については、国立大学の場合をみると、教授、助教授が直接に選挙を行つているのであるが、私立大学では殆んどが経営者（理事会）によつて選出されている状態である。私学においてはその機構にこうした問題のみならず、種々の問題があることは確かであり、まして附属校を有する場合、問題がさらに複雑化することは否なめないであろう。そこで寄附行為準備会がいただしている改正案と意見の分かれるところ、大問題はやはりまた、その選出法である。
総長は大学において選出されている状態である。
総長は当然であるとみるのである。
正案はこれまでの前述した通り、従来の院長＝総長という関係を、制度上分離するという方針をうちだしているが、今年の四月より小・中・高校の主事がそれぞれ総長の名目になつたように、機構の問題と共に、総長或いは院長という職の問題が起つてきている。
実務上いろいろとの問題が起つてくるのである。小・中・高校を大学の附属校として従属させるか否かということに関して、そうした附属校教職員の参加、不参加という問題とも関連して、そうした附属校教職員の参加、不参加という問題とも関連して、学生諸君の応援が望まれる。優勝祝賀会などの計画も用意されているが、詳しい事はいずれ発表される。
長と同一の者とし、理事会において任命するという小・中・高案である。そしてもう一つは、その選出に関しては大学教職員の公選で選出し、理事会によつて任命するという理学部案、経済学部案である。
また、これら各団体案以外のものとして、学生側から学生四百名につき一票の投票権を与えよ、などという要請が提出されており、現制度の改正を促すと共に、学園民主化への第一歩として、級委会を中心に総長公選の対策がねられている。
大学という特殊な社会においてその最高責任者の決定については、国立大学の場合をみると、教授、助教授が直接に選挙を行つているのであるが、私立大学では殆んどが経営者（理事会）によつて選出されている状態である。私学においてはその機構にこうした問題のみならず、種々の問題があることは確かであり、まして附属校を有する場合、問題がさらに複雑化することは否なめないであろう。そこで寄附行為準備会がいただしている改正案と意見の分かれるところ、大問題はやはりまた、その選出法である。
総長は大学において選出されている状態である。
総長は当然であるとみるのである。
正案はこれまでの前述した通り、従来の院長＝総長という関係を、制度上分離するという方針をうちだしているが、今年の四月より小・中・高校の主事がそれぞれ総長の名目になつたように、機構の問題と共に、総長或いは院長という職の問題が起つてきている。
実務上いろいろとの問題が起つてくるのである。小・中・高校を大学の附属校として従属させるか否かということに関して、そうした附属校教職員の参加、不参加という問題とも関連して、学生諸君の応援が望まれる。優勝祝賀会などの計画も用意されているが、詳しい事はいずれ発表される。
以上のように、総長選挙をめぐつて、その度ごとの改正案が、改正の最初の提案にくらべ、いろいろとなつてきているのは、現行の制度を改正する必要は充分あると考える。
以上のように、総長選挙をめぐつて、その度ごとの改正案が、改正の最初の提案にくらべ、いろいろとなつてきているのは、現行の制度を改正する必要は充分あると考える。
そして、先の改正案のうち、現在の制度、機構からみて、小・中・高案による院長と総長とを分離して、院長と理事長を同一の者にしする、というのがそれである。これは教職員の直接投票という公選制の立場で理学部案、経済学部案と一致する。
ただここに学生にも選挙権を与えよという学生の要望があるが、学生が直接総長選挙に干渉するという問題は一概にその是非を決定し難いものであろう。立命大、同志社大では学生二百名につき一票の投票権を認めているが、年毎に変つていく学生が、どれだけこうした問題に明確な認識がもてるかは疑問である。学生が単に諮問機関に参加するということもできるわけだが、この点学生自身の選挙権については慎重に考えてみるべきである。
とにかく総長公選をめぐつて大学関係者間において改正案が出た今、選挙制度の審議に際し我々は制度調査会の慎重なる検討を望むと共に、明年六月の総長選挙に際して、教職員の直接選挙によつて、民主的に選出された総長を迎えることを期待する。

第一回 新聞学会賞 懸賞 文芸作品募集のお知らせ

会告

このたび、当新聞学会では、本学学生諸君から、懸賞文芸作品を募集することになりました。
今や、全般的に文学界は高揚の一途を辿つております。一方、停滞久しかつた学内文学活動も、ようやく十余の同人誌グループが生まれ機運に乗つた感があります。この機に創作意欲を奮り、本学文学活動に、新風を送り、広いジャンルを切り開きたいと思います。
みなさまが、意欲的な、力強い、斬新な作品をお寄せ下さることを期待しています。
募集要項は次の通り。
一、作品（創作戯曲も含む）未発表作品一編
一、枚数　四百字詰原稿用紙三十枚内外
一、資格　本学々生（大学院生も含む）
一、締切り　九月末日
一、発表　本紙十月下旬号
一、懸賞金　一等（新聞学会賞）一篇五千円
　　佳作数篇一千円
一、送り先　立教大学新聞学会宛
一、選考委員　小松伸六、福田宏年、駒田信二、村松剛、小田切進、杉本秀太郎、野口定男（敬称略）
一、ペンネームの使用は自由（但し本名所属学部学年附記のこと）
なお、応募原稿は返却しません。版権は本紙に所属します
立教大学新聞学会

堂々三連覇を飾る

六大学野球

六大学野球春季リーグ戦において、本学野球部は開幕以来破竹の勢で去る五月十九日の立慶戦二回戦を待たずして優勝を確定、部史始まつて以来初の三連覇を飾つた。
六大学野球部での三連覇の記録は明大の四連覇というリーグ記録であるが、その他は早大の記録と共に数少い立派なものである。また目下続けている全勝の記録は大分以前の慶大の十戦全勝が一回あるのみで、もし立明戦で連勝すれば連覇タイ記録となる。立明戦は六月二、三日に行われるが、全勝記録を目指す試合に、学生諸君の応援が望まれる。優勝祝賀会などの計画も用意されているが、詳しい事はいずれ発表される。

スポーツ

【軟式庭球】
六大学リーグで優勝
五月三日から三日間、日比谷公園テニスコートで行われた東京六大学リーグで全勝を遂げた。又同じく九日から三日間開かれた関東学生春季リーグ戦では二位と相変らず抽選振りを発揮している。

【ヨット】
三大学定期戦で優勝
日、立、法三大学定期戦は五月十、十一日の両日横浜ヨット・ハーバーで開かれ、本学は総合211・1をあげて優勝した。二位明大（二〇〇・四）

【弓道】
上君野輝く優勝
五月五日、京都済寮館で開かれた第九回個人選手権（参加八百名）に本学から出場した上野真三君（経一）は総合優勝と技術優秀賞をあわせて勝ちとつた。

【バスケット】
新人戦で三位
関東大学新人戦（参加七校）は四月二十六日から十日間国民体育館で行われた。本学は明大、慶大に破れ三位にあまんじた。

【軟式野球】
春季リーグで三位
春季六大学軟式野球リーグ戦は五月十五日、早大の優勝で閉幕した。本学は六勝四敗の戦績で三位

【山岳】
岳川谷に遠征
山岳部は五月二日から八日まで十四名が参加して長野県北アルプスに遠征した。

【硬式庭球】
一部昇格ならず
過日の関東大学リーグ二部で優勝し一部昇格が期待されていたが、四月十九、二十日に一部リーグ下位の明大と対戦、5－4で惜敗して二部にとどまつた。

田島君ら出場

アジア大会に

アジア・グループの平和友好を約して二十ケ国の若人たちが参加する第三回アジア競技大会は、二十四日、天皇陛下の開会宣言をもつて開幕したが、本学からも、多数の役員、選手を送りこんでいる。
陸上　四〇〇・六〇〇米リレー
　　木村　修三
バドミントン　永井　栄一
　　奈良　節雄
バスケット　金川　英雄
　　川本礼治郎
以上五項目の出場者であるが、このほかにOBから多数の選手が出ている。

実験室建設遅れる

前号既報の理学部学生実験室および原子力研究室建設は一部設計のやり直しなどのために少し遅れる予定現在、二年の化学実験、三年の物理実験が犠牲となつているので学生間に早い着工を望む声があるが、いまのところはつきりした日は決まらず、鹿工も十月になりそうである。

お知らせ

診療所　夏休みおよび、必要な場合の救急箱の貸し出しについて診療所では混雑、紛失をふせぐために、貸し出す場合には、必ず、当日三日前までに届を出してからにしてほしいといつている。
同窓会　五月二十六日の同窓会定期総会の会場がプリンス・ホテルに変更された。

人事異動

任命▽理学部物理学科長事務取扱小川岩雄▽理学研究科原子物理学専攻博士課程主任解任、理学研究科原子物理学専攻修士課程主任任命、教授杉浦義勝▽理学研究科原子物理学専攻博士課程主任兼務　原子力研究所長、教授中川重雄▽文学研究科教授桑嶋　渡辺善太▽文学部、文学研究科教授桑嶋　白鳥清▽助教授　講師佐谷一彦、同生雲浩、同　野田一夫▽理学部助教授　藤川洋一郎、村松一郎▽理学部講師　黒須康之介、岩本文明、佐藤浩▽一般教育部講師奥野徹、スティーヴン・W・グリーン、嘱託　尾形典男、同神島二郎　松山定彦、高橋康之、寿田竜輔▽本年度文学部講師　野上幸子▽理学部助手　佐藤祐吉▽理学部研究補助員　斎藤誠（以上四月一日付）▽学生相談所員　教授佐々木剛、助教授赤司遵雄（四月二十一日付）
退職解任▽停年退職　教授景須康之介、同奥野徹▽理学部物理学科長事務取扱解任　助教授伊正美▽依願解職　講師清水裕、同原島鮮　同富水五郎、同五十嵐新次郎▽任期満了解職　講師亀谷俊司、同鈴木撃之、同古賀正三（以上三月三十一日付）

おことわり

「立教大学診断」と二面の「赤外線」は休載します。編集部

人物

動き

五月四日の法立二回戦は、神宮まで出掛けて応援団に混つてOB席で観戦した。連勝の希望に胸を膨らませて、みんな楽しそうだつた。ところが二〇三〇後の席に陣取つた一団が、凡そ学生席らしくない、騒ぐ騒えぬような左野次を飛ばすので、ふり返つてみると女を混えた様体の知れない連中だ。隣のOBに聞いてみると、どこかの学者らしいということ。楽しい気持は半減してしまつたが、その中に黒い眼鏡をかけた男が、指導している応援団の学生の一人に向つて「生意気な野郎だ。オイてめエの名前は何んだ？」と威嚇したかに見えた。なお、クラス討論は二十日から行われている。
その一人に「〇〇さん」と呼びかけ「オイ、学生席でもいいでしよう」と辞令低くして頼みはじめたが勿論連中は従う気配はない。そして遂に――こと程迄驚かされたことはないが――
「オイ、奴の名前はテンてんだ、あとで席のところへ寄こせ」と、命令したのである。学生はそのまま引き下つて行つた。試合も終りに近づいた頃、職員の一人が帰ろうとしたところ、
「テンだためえは、まだ終つてねエんだよ」と男の一人が威嚇すると、先に怒鳴られた学生がその職員を押しとめて、「ここに止めますから！！」と威嚇した方に向つてこぼしてしまつた。更に驚いたことには怒鳴られた学生がそれに対して今く無関心を装つていることだ。「あゝいう連中を生じさせるのは学生部の責任だ」と、OBたちの怒りの声は高まつてしまつた。

不愉快なOB応援席

波紋

パール・グレイに統一の最新スタイルの背広、空色のボーネックに濃紺の細の標識につまつたスポンの男子学生、切れの鋭を頭から被つたようなサツクライン落下傘スカートを上衣にしたようなマタニティドレスを着た女子学生など季節の開放感と自由の学府の目出た気分を反映しつつ、人目を引く服装をした者が目立つ。反面薄汚れたジャンパーにしわくちゃのズボン、下駄はきの御仁もいる。大部分の学生は黒色の学生服、または白のブラウスにカーディガン、タイトスカートなど地味なかにも学生らしさのある服装である。運動部の学生を除いて無帽に詰襟の上衣と巻ズボンの学生も多い▼ところで学生部で出しているフレッシュマンハンドブックの学生心得なるものに服装に関する事項として、男子学生は登校の際は制服（黒色詰襟）制帽を着用することを原則とし、己むを得ない事由のあるものは、学生部に届け出て、あらかじめ許可を受けること。なお「ズボン」は上衣と同質、同色なるものを用いること。夏季の服装は上衣を白のワイシャツ、または開襟シャツとする。女子学生は服装は自由であるが、華美にわたることなく…。とある▼学生委員会は学生らしさは外面によつてではなく授業内容その他の充実によつて内面から実れるものであるとの根拠に立つて男子学生の服装は学生らしい範囲以内で自由にすべきであるとの考えを出して行くとしている。（立大学生新聞第19号）しかし学校当局は学生心得撤廃の意思はないようである。また、現在学生部には日に二、三通異議届が出ているそうである▼「あれで学生かねエ」「まるでバーの女給かタンサーみたいだね」という会話もきかれるこの頃の立教四丁目である。しかし大部分の学生は学生心得には反するけれども学生らしい服装をしている。だが、敢て無理させようとも甘用をなしていない学生心得を学校当局はなんのために後生大事とかかえているのだろうか。それにしても身についていない華奥な服装をしている学生も学生である。

会社就職案内 ダイヤモンド

大学篇

全国の主要業種別五六〇会社の概要を、細密に調査・分析し、あわせて就職調査を行い、さらにその入社試験問題を収録してあり、また主要会社の問題には解答がつけてあるので至便。激しい就職戦の勝者となるために必読の書！
発売！
東京千代田区麹町三　本社直接注文は前金で願います　振替東京二五九七六
ダイヤモンド社
―二五〇円・二20

会計学

品田誠平著　A5上製　価五〇〇円　我要有恵　栄寿著
社会的歴史的に企業・会計の性格を明かにし、会計対象を分析し、会計上の諸概念を詳細に解説。入門書教科書研究書として最適の書
ポール・ガーナー著　品田誠平他三氏共訳　A5一九二頁価三八〇円
I 総則・物権法　三六〇頁　四二四円
II 債権法　三〇〇円　三三〇円
III 親族法相続法　四五〇頁　三三〇円
原価計算の発展
第一巻　民法
現代民法学の最高水準を民法典の編別に従つて忠実に説き大学書として最適。豊富な内容を簡明にのべている点比類なく、学者の既得の知識の整理・仕上げにも絶好。定評ある名著。
一粒社
東京谷中真島町　振替東京123190

現代経済学理論入門

経済セミナー 臨時増刊

〈発売中〉価120円
現代経済学の諸理論は今日すでに常識化され官庁や企業等で広くとり活用され、政策決定に重要な役割を果している。そのような経済理論はどういう現実の課題に答えどのような理論構造をもつているか？　新進気鋭の第一線学者によつてその全貌を平易に解説した。
主要内容
一般均衡分析……福岡正夫
景気循環の理論……岡本喜治
資本蓄積の理論……宮崎義一
産業連関分析……嘉治元郎
リニアー・プログラミング……宮下藤太郎
経済成長とプログラミング……渡部経彦
ゲームの理論……稲田献一
エコノメトリックス……宮沢光一
現代経済理論の基本性格……大石泰彦
誰にもわかる最新の経済理論！
東京　京橋　日本評論社新社　振替東京16

大学ドイツ語講座

相良守峯博士監修　A5判　価各巻三三〇円〒48
I 前期篇　高橋健二・植田敏郎・高橋良一著
II 後期篇　新刊VI 生活篇
III 文科篇　会話の実例と話し方、手紙の書き方と文例、日常生活から風俗習慣のすべてについて
IV 理科篇
V 医科篇
全六巻（完結）
文博佐藤通次　文博成瀬清共著

小独和辞典

ポケット判　価二八〇円　送料一六円
橋本文夫著　〔全三巻〕　A5判価各巻一八〇円〒24

橋本ドイツ語講座

文法と韻文とが一体となつた新切明快な指導書

入門ドイツ語

栄沢寿著　初級から中級へ　価二八〇円〒32

ドイツ語の基礎

橋本文夫著　価四〇〇円〒48

わかり易いドイツ語

青木一郎著　価一六〇円〒24

中級ドイツ語

青木一郎著　わかり易い　価一八〇円〒24

表解ドイツ文法

青木一郎著　おぼえ易い　価二〇〇円〒24

ドイツ語の鍵

郁文堂編集部編　価一五〇円〒16
文法問題集――ヒントと解答付
〔目録（内容見本）呈〕
東京文京区東大正門前　郁文堂　振替東京14981

東京都公安委員会指定

普通・小型各種免許
技術証明発行

夜間照明完備
池袋自動車練習所
所長　和田等
池袋4丁目・電話(97)4424
国電池袋西口より徒歩10分・バス池袋4丁目熊野神社前下車

東京堂

1階　一般書、参考書、雑誌
2階　専門書、洋書、文庫
神田神保町　1の17
TEL(29)5181

立教大學新聞

定期購読のおすすめ
立教文化の中心をなす立教大学新聞は充実した編集と企画から常に皆様の新聞として自由な立場、自由な視野にたち、数ある学内報道機関の中心をなしております。
原則として毎月二回発行（購読料・一年分二百円送料共）
東京都豊島区池袋三丁目
立教大学新聞学会
振替東京七〇八五二

優勝特集号発売予定

野球部三連覇の偉業を讃えて
週刊紙型による豪華版　三十二頁
（内容）
三連覇の経過、全選手のプロフィル
辻監督の絵で、グラビア戦記
吉村、田中両氏の戦評等掲載
発売予定日　六月上旬
立教大学新聞学会

時局放談

日中友好関係を阻むもの

内山完造

日中両国の関係で、最悪の事態に陥つて来ておりますことは毎日の新聞面にはつきり見られるところであります。然しこの原因となると各人各様の見方であつて、未だ一定したものが発見されず居らん様であります。年来中日友好を唱導し、居ります私は今日の事態を非常に憂慮し居る一人であります。

そこでこの問題について少し考えて見たいと思います。申すまでもなくこの事態の原因には近因と遠因の二つがありまして、近因から申しますと、岸政府が出現してその中国に対する態度が急に非友好的になつたのであります。その点は従来日本の首相で台湾の所謂中華民国を訪問した人は一人もありませんでしたが、東南亜訪問の途上吉首相はわざわざ台湾に中華民国政府主席蔣介石を訪問して親しく懇談した。其後蔣介石も近頃は忘れたように左つて居ると大陸反抗の話を持ち出して、岸首相はこれに大いに賛成したり油をかけたりしたということは、当時各新聞通信によつて伝えられたとおりであります。

日本の首相が台湾を訪問するということで、正に中華人民共和国（以下中国と記す）に対しては相当の刺激であることは申すまでもありません。そのうえ、大陸反抗に油をかけたとなるとそれは徹底的な中国に対する非友好的態度であることは、低脳児でない限り誰れも肯定出来ることであります。

更にその中国との第四次貿易協定が並々ならぬ手を話合ではあつたが、協定が調印されたので国民的歓喜が湧いて居るのに、政府はこれに冷水をぶつかけました。そして旅施を否定しました。其時の岸首相の声明は豪ろうとしたものであつて、遺憾千万な話であります。

何んという非友好的なものであるか。首相も外相も政治は政治で貿易は貿易だといいながら貿易協定の談話に自ら中国は承認しないとか、だけ中国が厳重に「中国は一つなのだ」と声明しているのに、ワザワザアメリカの陰謀である中華民国の名を冒じて恰も二つの中国を証明する様な言葉を使つて居ることは、中国側が政治をからませて非難して居る自分の言葉の通りに日本側が政治をからませて居るのであります。

この協定に対して台湾側から横槍がはいると中国側に対して、ただ一言、協定の実施に努力しますといえばそれでよいことであるのになんだかんだと言はないでもいいことを言つて、それが中国側を大いに刺激したのであります。

たまたま長崎の浜野パーティで開会中の日中友好協会交部主催の切紙切手展々覧会場での中国国旗の引きずり問題が発生したのであります。これらが近因でありまして更に遠因について考えますと吉田茂総理が担当したサンフランシスコの講和条約会議の際、対中国に英米見解の不一致から北京と台湾の何れの政府を中国政府として、講和の相手国とするかということを日本の自由選択に任せた、其時日本の吉田茂首相は所謂吉田書簡なるものをアメリカに送つて屈辱的態度をとつて、アメリカに盲従して台湾を相手国としたのであります。これが今日の困難の主因と言はねばなりません。

現在日本の最悪の事態の外的原因としてもいうべきでありましようこうした事態の遠因、内因、外因の集積がたまたま最近の近因を口火として、発火したものであります。

新中国に対する認識不足

盲目的な対米外交

言葉でゴマカスことであるという古い考えが不知不識仍いて居ることであります。なお、そのうえ日本人は革命ということを本で読んで知つては居りますが、革命の実体を少しも見たことがないということがあるので革命がおわつた新中国がさつぱり解らないのであります。それは政治はなんでも上手になつて居るのであります。こんなことになつたのは、実は日本政府の政治的良心に、あらゆる問題は其実体が基本であるという考えのないことに起因するのであると私は思います。しかもそれのみならず輪に輪をかけたことがあります。

は政治の面では、天皇が主人でありましたのが国民が主人となりまして、民主々義の国土となつたのであります。二つの領土そは離ましたが、基本的国土である四つの島は以前のままでありまして、人口もその後増して八千万人となりましたが、国の実体としては変りなかつたのであります。しかも早く講和しておれば面倒はなかつたのでありますが米英等がグズグズしている間に、中国では大革命が成功して、その結果主席であつた蔣介石は政府と共に追い出されて、日本から返還された小島台湾に逃げこんで、大陸とは絶縁された形の一地方政権となつたのであります。新中国は毛沢東を主席とする、中華人民共和国となつたのでありまして、実体としては六億の中国人が依然一千万方キロの国土の上に生活しているのであります。だが、日本も中国も変りはしたが、戦争した実体は変つてはいないのであります。然し、サンフランシスコ講和会議となりまして、日本は台湾の政府と講和条約を結んだのであります。しかしそれはただ形式上の中国であつて実体とは無関係のものでありますから、条約は結んだが実体の新中国とは何んの関係もないのでありますが、それは当然のことであります。今日、最悪の事態を招来したこれが根本的な遠因であります。ことで一寸言いたいことは米国の対中国政策は戦後の中国を蔣介石主席を抱き込んで、対ソ連防共長城を築くつもりで、国共合作政府を造るために、その技師としてマーシャル元帥を特使として中国に送り込んで何億ドルか、何十億ドルかを借款という形で蔣介石の軍隊を米装備にしました。その数は三十九個師団といわれました。強力な二の陸軍を中心としての米国の飛躍は一時、目ざましいものがありましたが、事は全く失敗に終りました。防共どころか中国は共産党による革命が成功して大陸軍はそのまま新中国に馳せ参して、共産軍となり、蔣介石は台湾に渡りました。然し、米国はフィリッピンから台湾、日本、南鮮を対ソ連中国に対しての防波堤とすべく、今なお完全の中華民国、実は中国の一省台湾省を第七艦隊まで出して、大陸と引きはなして、これが中華民国だと台湾も占領しているのであります。もつとも一度南鮮をあやつつて北鮮を併呑せんとして失敗したこともあつたので一口にいつて、米国の対東洋政策は中国においては完全に失敗しているのであります。その後失敗者に盲目的に追従しているのが日本であるが故に日本の対中国政策が失敗するのは当前のことであるといはねばなりません。

こうした事態の遠因、内因、外因の集積がたまたま最近の近因を口火として、発火したものであります。これが今日の困難の主因となつて居るのであります。こんなことになつたのは、実は日本政府の政治的良心に、あらゆる問題は其実体が基本であるという考えのないことに起因するのであると私は思います。しかもそれのみならず輪に輪をかけたことがあります。それは政治はなんでも上手になつて居るのであります。

中国側の方のことを考えて見ますと、蔣介石を主席とした大中華民国という国名で、六億（現在）の人口の住む一千万方キロの国土を持つた国でありました。この二つの国が戦争したのであつて、日本が受けたその結果として、日本は政治の面では、天皇が主人であり、民主々義の国土となつたのであります。二つの領土そは離ましたが、基本的国土である四つの島は以前のままでありまして、人口もその後増して八千万人となりましたが、国の実体としては変りなかつたのであります。しかも早く講和しておれば面倒はなかつたのでありますが米英等がグズグズしている間に、中国では大革命が成功して、その結果主席であつた蔣介石は政府と共に追い出されて、日本から返還された小島台湾に逃げこんで、大陸とは絶縁された形の一地方政権となつたのであります。新中国は毛沢東を主席とする、中華人民共和国となつたのでありまして、実体としては六億の中国人が依然一千万方キロの国土の上に生活しているのであります。だが、日本も中国も変りはしたが、戦争した実体は変つてはいないのであります。然し、サンフランシスコ講和会議となりまして、日本は台湾の政府と講和条約を結んだのであります。しかしそれはただ形式上の中国であつて実体とは無関係のものでありますから、条約は結んだが実体の新中国とは何んの関係もないのでありますが、それは当然のことであります。今日、最悪の事態を招来したこれが根本的な遠因であります。ことで一寸言いたいことは米国の対中国政策は戦後の中国を蔣介石主席を抱き込んで、対ソ連防共長城を築くつもりで、国共合作政府を造るために、その技師としてマーシャル元帥を特使として中国に送り込んで何億ドルか、何十億ドルかを借款という形で蔣介石の軍隊を米装備にしました。その数は三十九個師団といわれました。強力な二の陸軍を中心としての米国の飛躍は一時、目ざましいものがありましたが、事は全く失敗に終りました。防共どころか中国は共産党による革命が成功して大陸軍はそのまま新中国に馳せ参して、共産軍となり、蔣介石は台湾に渡りました。然し、米国はフィリッピンから台湾、日本、南鮮を対ソ連中国に対しての防波堤とすべく、今なお完全の中華民国、実は中国の一省台湾省を第七艦隊まで出して、大陸と引きはなして、これが中華民国だと台湾も占領しているのであります。もつとも一度南鮮をあやつつて北鮮を併呑せんとして失敗したこともあつたので一口にいつて、米国の対東洋政策は中国においては完全に失敗しているのであります。その後失敗者に盲目的に追従しているのが日本であるが故に日本の対中国政策が失敗するのは当前のことであるといはねばなりません。

現在日本の最悪の事態の外的原因としてもいうべきでありましようこうした事態の遠因、内因、外因の集積がたまたま最近の近因を口火として、発火したものであります。これが今日の困難の主因となつて居るのであります。こんなことになつたのは、実は日本政府の政治的良心に、あらゆる問題は其実体が基本であるという考えのないことに起因するのであると私は思います。しかもそれのみならず輪に輪をかけたことがあります。それは政治はなんでも上手になつて居るのであります。

ことを土台として勝ち得たものであるから、どうしてもこれら最大多数の人々の希望を充たす以前に政治はないのであります今日の中国では最大多数の人民の念願を満足させることが政治である。という事であります。それは革命以後今日まで七十八年のことではあるが全くその通りであります。すると五億の勤労者の念願する戦争があつてはならん。平和であつてくれという念願に政府は答えなければならんのであります。だから今日中国は自発的な戦争は出来ないのであります。時々日本から米国の軍隊が引揚げたら中国が必ず日本を占領するなどという人がありますが、実に馬鹿馬鹿しいことであります。その人自身の心が占領を欲するが故にそんなことをいうのだと私は思うのであります。それは兎に角として中国は国内的に決して自発的戦争はしないと私は思う。国際的にも若しも戦争が起つたなら今日の戦争は原子爆弾や水素爆弾の戦争であるから、人間は出部遺憾ながら無論別に殺されるということを、彼等は学問としてでなく極めて直観的に知つて居るのだから、中国は国内的にも国際的にも戦争を自己起すことはないと私は思うて居ります。

現在の日本は大陸の中国関係に於いてのみ最悪の事態ではなく、全面的に史上最大の危機に直面して居ると私は思います。それは今日程政治上に真実が失われたことは未だ有つたことが無いと思います。このことが危機でなくてなんでありましようか。何んでもかんでも策略を使う、計略を用いる、謀略でピンカケル、商略でごまかす真実というものは脚かの毛程も見られません。日本救国の要、今日より急はないと思います。どうした意味からも私は真に新しい中国と提携する以前に救国の道はないとも思うて居ります。（筆者・日中友好協会副会長）夫

映画は語る

夫婦とは……それは生涯の格闘だ

『杏つ子』（東宝）

あんずを食べたことのあるひとはその味を知つている。が、その味をうまく表現することはむずかしい。あんずを実際に食べてみる以外にテはない。

夫婦というものもこんなものらしい、いやこんなものだ、いつてみれば「生涯の格闘だ」という話のわかる父（山村聡）の言葉を、娘（香川京子）はそのまま信じている。父のいうことだから、娘も失敗だつた夫（木村功）との結婚生活を清算しようともせず、一生懸命「生涯の格闘」を演ずる。この映画のテーマである。

有名作家の娘である杏子は近所のラジオの修理をやり、売れない原稿も書く、いつこうに風采のあがらない青年（木村功）との結婚まで敢同の見合いをする。画面に出てくるだけでも二度、一流製薬会社と一流官庁に勤務する二人の男がその相手である。作家の家らしく見合いのやり方が一風かわつている。まず茶の間で見合いの相手が娘の家族と雑談している。そこへ洗髪剤の杏子が顔を出し父に紹介される。と、お互にモジモジする間もなく「どうだい、その辺でも散歩したら」と父がいつもの声をかける。杏子は自転車を二台だし、相手をいつもの湖畔につれていく。そこで男は一緒に「見合いしてやつぱりよかつたと思うんです」と意思表示する。が、作家の娘らしく男性を見るメは厳しい、というよりもせいたくである。なかなかのことで「いいわ」とはいわない。その娘が一実におもしろいことに一近所のラジオをいじくる一見サエない男のプロポーズを「いいわ」と受け入れる。娘はこのプロポーズを一種の「偶然」と解せる。そして人間はいつもこの偶然によつて行動するものだ、と人生を解釈している。

で、このサエない男はサエない小説を書く。有名作家を義父に持つこの無子夫人はそれ故に苦しむ。義父と妻が、雑誌にも載らない自分の小説をジロジロ軽蔑の眼で見ているのがたまらない。才能もないくせに…という妻の眼と、俺だつて…というあわれなる夫の眼とが火花を散らす。小説家の義父はこの不幸な夫婦を彼一流の〝夫婦哲学〟をもつて観察する。

この映画は夫婦とは何か、という問にずばり「生涯の格闘」という答をだしている。ソクラテス以来、未解決の人生とは何か、に似た問を、ある種の確信をもつて割りきつている。そしてさらに、あんずにも似た夫婦の味を適確に描写している佳作である。原作・室生犀星、脚色・田中澄江、監督・成瀬巳喜男。（武）

芸能アトリエ

一枚◆随想

旗一兵

最近頼まれて或る芸能学校入学応募者の審査に行つた児童部と本科をあわせて百六十名ぐらい押しかけてきた。児童部では圧倒的に女の子が多く、成年者では逆に男性ばかりで、女性はほんの三、四名にすぎなかつた。従つてその学校では追い打ち広告しで、男の子供と女の成年者を急募して、バランスを取ろうとしている。

私の小さな娘も劇団「若草」に入つているが、やはり男の子供が少ないので、女の子より男の子のほうが、映画やテレビに出演できる機会が多いと、うらやんでいる。男の子には女の子以上に上級学校へすすむ準備競争が激しい。また、俳優の真似をするよりも「野球教室」的なところで長嶋や金田を気取つたほうが面白いのにちがいない。

しかし、女の子もそろそろ中学校へ行き出すころになると、そういう芸能アトリエをやめてゆくものが多い。高校を卒業するまでは、将来女優の志望をもつていても、実際上はどうしても中断しなければならなくなるのだ。勤労な学校屋は当分安泰のようだ。

（はた・いつぺい　劇作家）

時局放談

新聞に対する認識不足

内山完造

日中両国の関係で、最悪の事態に陥つて来ておりますことは毎日の新聞面にはつきり見られるところであります。然しこの原因となると各人各様の見方であつて、未だ一定したものが発見されず居らん様であります。年来中日友好を唱導し、居ります私は今日の事態を非常に憂慮し居る一人であります。

そこでこの問題について少し考えて見たいと思います。申すまでもなくこの事態の原因には近因と遠因の二つがありまして、近因から申しますと、岸政府が出現してその中国に対する態度が急に非友好的になつたのであります。その点は従来日本の首相で台湾の所謂中華民国を訪問した人は一人もありませんでしたが、東南亜訪問の途上吉首相はわざわざ台湾に中華民国政府主席蔣介石を訪問して親しく懇談した。其後蔣介石も近頃は忘れたように左つて居ると大陸反抗の話を持ち出して、岸首相はこれに大いに賛成したり油をかけたりしたということは、当時各新聞通信によつて伝えられたとおりであります。

日本の首相が台湾を訪問するということで、正に中華人民共和国（以下中国と記す）に対しては相当の刺激であることは申すまでもありません。そのうえ、大陸反抗に油をかけたとなるとそれは徹底的な中国に対する非友好的態度であることは、低脳児でない限り誰れも肯定出来ることであります。

更にその中国との第四次貿易協定が並々ならぬ手を話合ではあつたが、協定が調印されたので国民的歓喜が湧いて居るのに、政府はこれに冷水をぶつかけました。そして旅施を否定しました。其時の岸首相の声明は豪ろうとしたものであつて遺憾千万な話であります。

何んという非友好的なものであるか。首相も外相も政治は政治で貿易は貿易だといいながら貿易協定の談話に自ら中国は承認しないとか、だけ中国が厳重に「中国は一つなのだ」と声明しているのに、ワザワザアメリカの陰謀である中華民国の名を冒じて恰も二つの中国を証明する様な言葉を使つて居ることは、中国側が政治をからませて非難して居る自分の言葉の通りに日本側が政治をからませて居るのであります。

この協定に対して台湾側から横槍がはいると中国側に対して、ただ一言、協定の実施に努力しますといえばそれでよいことであるのになんだかんだと言はないでもいいことを言つて、それが中国側を大いに刺激したのであります。

たまたま長崎の浜野パーティで開会中の日中友好協会交部主催の切紙切手展々覧会場での中国国旗の引きずり問題が発生したのであります。これらが近因でありまして更に遠因について考えますと吉田茂総理が担当したサンフランシスコの講和条約会議の際、対中国に英米見解の不一致から北京と台湾の何れの政府を中国政府として、講和の相手国とするかということを日本の自由選択に任せた、其時日本の吉田茂首相は所謂吉田書簡なるものをアメリカに送つて屈辱的態度をとつて、アメリカに盲従して台湾を相手国としたのであります。これが今日の困難の主因となつて居るのであります。こんなことになつたのは、実は日本政府の政治的良心に、あらゆる問題は其実体が基本であるという考えのないことに起因するのであると私は思います。しかもそれのみならず輪に輪をかけたことがあります。それは政治はなんでも上手になつて居るのであります。

中国側の方のことを考えて見ますと、蔣介石を主席とした大中華民国という国名で、六億（現在）の人口の住む一千万方キロの国土を持つた国でありました。この二つの国が戦争したのであつて、日本が受けたその結果として、日本は政治の面では、天皇が主人であり、民主々義の国土となつたのであります。二つの領土そは離ましたが、基本的国土である四つの島は以前のままでありまして、人口もその後増して八千万人となりましたが、国の実体としては変りなかつたのであります。しかも早く講和しておれば面倒はなかつたのでありますが米英等がグズグズしている間に、中国では大革命が成功して、その結果主席であつた蔣介石は政府と共に追い出されて、日本から返還された小島台湾に逃げこんで、大陸とは絶縁された形の一地方政権となつたのであります。新中国は毛沢東を主席とする、中華人民共和国となつたのでありまして、実体としては六億の中国人が依然一千万方キロの国土の上に生活しているのであります。だが、日本も中国も変りはしたが、戦争した実体は変つてはいないのであります。然し、サンフランシスコ講和会議となりまして、日本は台湾の政府と講和条約を結んだのであります。しかしそれはただ形式上の中国であつて実体とは無関係のものでありますから、条約は結んだが実体の新中国とは何んの関係もないのでありますが、それは当然のことであります。今日、最悪の事態を招来したこれが根本的な遠因であります。ことで一寸言いたいことは米国の対中国政策は戦後の中国を蔣介石主席を抱き込んで、対ソ連防共長城を築くつもりで、国共合作政府を造るために、その技師としてマーシャル元帥を特使として中国に送り込んで何億ドルか、何十億ドルかを借款という形で蔣介石の軍隊を米装備にしました。その数は三十九個師団といわれました。強力な二の陸軍を中心としての米国の飛躍は一時、目ざましいものがありましたが、事は全く失敗に終りました。防共どころか中国は共産党による革命が成功して大陸軍はそのまま新中国に馳せ参して、共産軍となり、蔣介石は台湾に渡りました。然し、米国はフィリッピンから台湾、日本、南鮮を対ソ連中国に対しての防波堤とすべく、今なお完全の中華民国、実は中国の一省台湾省を第七艦隊まで出して、大陸と引きはなして、これが中華民国だと台湾も占領しているのであります。もつとも一度南鮮をあやつつて北鮮を併呑せんとして失敗したこともあつたので一口にいつて、米国の対東洋政策は中国においては完全に失敗しているのであります。その後失敗者に盲目的に追従しているのが日本であるが故に日本の対中国政策が失敗するのは当前のことであるといはねばなりません。

現在日本の最悪の事態の外的原因としてもいうべきでありましようこうした事態の遠因、内因、外因の集積がたまたま最近の近因を口火として、発火したものであります。これが今日の困難の主因となつて居るのであります。こんなことになつたのは、実は日本政府の政治的良心に、あらゆる問題は其実体が基本であるという考えのないことに起因するのであると私は思います。しかもそれのみならず輪に輪をかけたことがあります。それは政治はなんでも上手になつて居るのであります。

ことを土台として勝ち得たものであるから、どうしてもこれら最大多数の人々の希望を充たす以前に政治はないのであります今日の中国では最大多数の人民の念願を満足させることが政治である。という事であります。それは革命以後今日まで七十八年のことではあるが全くその通りであります。すると五億の勤労者の念願する戦争があつてはならん。平和であつてくれという念願に政府は答えなければならんのであります。だから今日中国は自発的な戦争は出来ないのであります。時々日本から米国の軍隊が引揚げたら中国が必ず日本を占領するなどという人がありますが、実に馬鹿馬鹿しいことであります。その人自身の心が占領を欲するが故にそんなことをいうのだと私は思うのであります。それは兎に角として中国は国内的に決して自発的戦争はしないと私は思う。国際的にも若しも戦争が起つたなら今日の戦争は原子爆弾や水素爆弾の戦争であるから、人間は出部遺憾ながら無論別に殺されるということを、彼等は学問としてでなく極めて直観的に知つて居るのだから、中国は国内的にも国際的にも戦争を自己起すことはないと私は思うて居ります。

現在の日本は大陸の中国関係に於いてのみ最悪の事態ではなく、全面的に史上最大の危機に直面して居ると私は思います。それは今日程政治上に真実が失われたことは未だ有つたことが無いと思います。このことが危機でなくてなんでありましようか。何んでもかんでも策略を使う、計略を用いる、謀略でピンカケル、商略でごまかす真実というものは脚かの毛程も見られません。日本救国の要、今日より急はないと思います。どうした意味からも私は真に新しい中国と提携する以前に救国の道はないとも思うて居ります。（筆者・日中友好協会副会長）夫

不感症の文学

「同人誌評」を終えて

停迷と自己喪失の世界

美、もしくは、美の様式というものは絶えず変りつつある。そしてそれは、新しい人間像を常に追求しているが、従つて美は、脱落のもつ美しさという、常識の価値にまで自ら誘われようとする。その端緒において等しいものであることには変りない。芸術は滅まないというが万葉のプリミティブな「ますらをさ」という美の姿でも、藤原期の「わび」という美の姿でも、中世の「すき」「もののあわれ」町人文化の「いき」いづれもそれらは自然のものへよりリアルなものへ、一つの衝動的な力をもつて移行することの美しさにおいて共通的なのである。過去の重いものを振り捨て去ることにおいて弁証法的な「螺旋の美」の構造が「雰囲気の美」として表現されていくからである。メカニズムの粋をこらした近代建築も勿論美しい。と同時に桂離宮や竜安寺の庭の美しいと事実である。

封建制からルネサンスの時代を経て人間個人の自覚によみがえる時、自分がこの世界を見ているのだという新たな意識を持つた人々は、十六世紀までの宗教画の神から遠さかつたものは絵の中にいるという感覚を捨てて、はじめて太陽の明るい光を描いた。それが十九世紀に至るとゴッホあるいは、ゴーガンのあの光の洪水、太陽の光の讃美に達した。人々は光の美しさを、ルネサンスの時代にはいまだ人間の自覚によみがえる時、自分がこの世界を見ているのだという新たな意識を持つた人々は、十六世紀までの宗教画の神から遠さかつたものは絵の中にいるという感覚を捨てて、はじめて太陽の明るい光を描いた。それが十九世紀に至るとゴッホあるいは、ゴーガンのあの光の洪水、太陽の光の讃美に達した。人々は光

ピカソ、ブラック、ルオー、ルソー、ブランクーシ、ムーア、ジャコメッティ、ボッシュ、ミロ、ベーコン、ポロック、ウォーホル、ロバート・ラウシェンバーグ、ジャスパー・ジョーンズ、ジョン・ケージ、ジョン・ケーガン、ジョン・ケーガン、ジョン・ケーガン